

Y17a プラネタリーディフェンス会議の成果と課題

熊谷謙一 東京国際大学、日本スペースガード協会

小惑星の地球衝突に関する専門家の国際会議である「プラネタリーディフェンス会議（PDC: Planetary Defense Conference）は、2009年にはじまり、今年5月の南アフリカ・ケープタウンでの会議で9回目を迎えた。本発表では、まず、発表者が2017年以降、5回連続でPDCに参加しており、その視点から、同会議の成果と課題を論ずる。さらに、2029年に小惑星アポフィス（Apophis）が地球に著しく接近し、また、国連がこの年を「世界小惑星認識・地球防衛年（International Year of Asteroid Awareness and Planetary Defense）」に指定しことを踏まえ、世界が天文学の普及と宇宙への関心の高揚に重要な時期を迎えていることを示す。PDCのあゆみは、その前身から2010年までが第一期で、地上や探査機による観測と理論分析が中心であった。2010年末の日本のはやぶさのサンプルリターンで第二期に入り、小惑星の構成や形成を直接分析する時代を迎えた。第三期は、米国の探査機が小惑星の軌道変更に成功したことに始まり、地球防衛の最有力手段の一つの実証が始まった。またアポフィス超接近に向けて、欧米、日本がプログラムを展開し、中国もこれとは別に小惑星探査に加わった。また、PDCの第二期以降には、天文宇宙の分野に加え、防災、人権、経済など社会的分野の対策や研究も進められている。これからは、国連などの活動との協力の実質を高めるとともに、専門家と市民の取り組みが連携し、2030年には次世代を迎えるといわれる国連のSDGs（Sustainable Development Goals:2030年がゴール）との連携も視野に、宇宙と天文の分野の研究の前進ならびに社会的責任を推進する道を探る。

以下で、講演の登録時や予稿を作成